

# オンラインによる反応時間を指標とした隠匿情報検査の可能性の検討(2)

○水師葉月<sup>1</sup>・古満伊里<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>広島修道大学大学院人文科学研究科・<sup>2</sup>広島修道大学健康科学部)

## 研究の目的

反応時間を指標とする隠匿情報検査 (RT-CIT) は簡便性の観点から再注目されている。RT-CIT の質問項目の提示様式は、Single-Probe Protocol (以下 SPP) と Multiple-Probe Protocol (以下 MPP) とに分かれる (Lukács ら, 2017)。前者は、裁決・非裁決・標的の各項目を、凶器や犯行場所といったカテゴリ単位で提示する。後者は、全ての質問項目を同一検査内でランダムに提示する。

水師・古満 (2022, 日本心理学会第 86 回大会) は、SPP による裁決・非裁決項目の弁別力を検討した。その結果、各項目に対する平均反応時間には差がなかった。しかしながら、裁決・非裁決項目に対する反応時間の分布形状は、有罪群と無罪群とでは有意に異なっていた。本研究では、MPP による裁決・非裁決項目の弁別力を検討した。新型コロナの影響もありオンライン検査の可能性も検討した。本研究は著者所属機関の倫理委員会による承認を得た (第 2021-0017 号)。

## 方法

**実験参加者** 有罪群と無罪群各 20 名であった。

**窃盗シナリオ課題** 有罪群の実験参加者は、「自分自身が窃盗犯としてある老婆宅に侵入し、金目の物を盗み逃走する」という犯罪シナリオを読んだ。シナリオ中の『侵入経路』『侵入部屋』『盗品』『凶器』『車の色』については、各カテゴリの選択肢の中から実験参加者自身が選んでシナリオを完成させた。ここで選択した各項目が裁決項目となり、それ以外の 4 項目が非裁決項目となった。

**手続き** 実験は教示を含め Zoom で通話しながら非対面で行った。実験参加者には「この検査によって窃盗を行ったと判定されないようにしてください。検査を無事にすり抜けることができれば謝礼を呈します。」と教示した。RT-CIT は、パソコンの画面上部に提示する「これは犯罪に属しますか」という質問に対して、画面中央に提示する裁決・非裁決・標的の各項目を、画面左右に提示する「はい」「いいえ」に対応したキー (A キー、

L キー) を押すことで分類する課題であった。裁決項目と非裁決項目に対しては「いいえ」で回答するよう求めた。実験参加者の注意を維持するための標的項目に対しては「はい」で回答するよう求めた。例えば、『盗品』カテゴリの標的項目は「バッグ」であり、実験参加者が『盗品』として「指輪」を選択した場合、非裁決項目は「預金通帳」「高級腕時計」「クレジットカード」「現金」となった。それぞれのカテゴリの裁決・非裁決・標的の各項目は全試行を通じて 6 回ずつランダムに提示した。試行間間隔は 500~1000ms であった。誤答および 800ms まで未回答の場合はその旨のフィードバックを画面上で行った。

## 結果と考察

誤答および平均反応時間±3SD の試行を分析から除外した。反応時間に極度の遅延が認められた実験参加者を除外したため、分析対象者は有罪群 20 名、無罪群 19 名となった。

反応時間を従属変数として群 (有罪・無罪) × 項目 (裁決・非裁決) の 2 要因分散分析を行った。その結果、項目の主効果 ( $F(1,37) = 4.70, p < .05, \eta^2_p = .11$ )、群および項目の交互作用 ( $F(1,37) = 10.74, p < .01, \eta^2_p = .23$ ) が有意であった。単純主効果の検定を行った結果、有罪群において非裁決項目よりも裁決項目に対する反応時間が長かった ( $p < .01$ )。これは、MPP による裁決・非裁決項目の弁別力が SPP よりも優れていることを意味する。今後は、RT-CIT の手続き上の条件を整備し、判定基準を作成する。

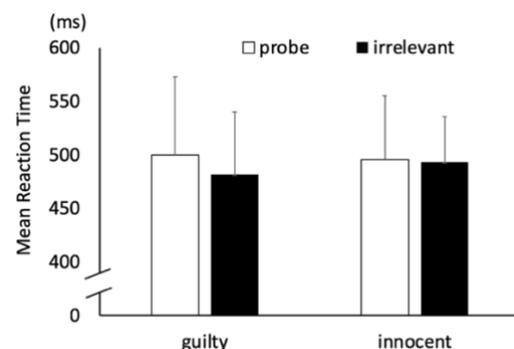


Figure 1. Mean reaction time for each item by condition.